

御歌所と歌会始の政治的な役割

カルブネ マリア

明治時代の御歌所は様々な役目を果たしていたが、特に明治十年から文壇に大きな影響を与えた。皇室や華族の和歌を訂正したり、歌会を催したり、教育勅語を支援する組織を立ち上げたり、天皇の御製を新聞や教科書に発表したりすることによって、和歌を中心とした政治的な理論を実現した。御歌所の活動の中でおそらく最も有名であるのは、歌会始を再興したことと、そこへの民間人の参加を可能にしたことだ。明治七年には一般国民からの詠進も広く認められるようになり、明治十二年からは詠進歌も詠みあげられるようになった。明治初期から現在まで歌会始が連続的に催されてきたことが、研究者によって明らかにされている。明治期最初の歌会始は、天皇のご発意によって催されたが、明治十九年から枢密顧問官男爵高崎正風が御歌所長になり、歌会始の御題を出題するようになった。

照沼好文氏によると、明治期における御歌所の創設と歌会始復興の動機には、日本古来の伝統を尊重することと、文化の再興を念願することとが、底流に潜んでいたとされる。実際、新聞に発表された御製とは対照的に、歌会始の御題や詠進歌には、時流の影響が見られない。つまり、歌会始もまた、天皇と民族の距離を縮めるために機能していたのではないだろうか。このような観点から、歌会始で予選された和歌が、天皇制というイデオロギーの構築にどのように寄与したのかを探求したい。

本発表では、Flood Christopher の「政治的な神話 *political myth*」という概念を用いて、歌会始の和歌を分析する。「政治的な神話」とは、イデオロギーに特徴づけられた語りとして、過去や近代の出来事を説明し、社会的に認めさせる叙述のことである。例えば、紀元節や天長節もまた、「政治的な神話」を伝達し強化する機能を持っていたと言える。本報告では、日露戦争時の歌会始の詠進歌を、新聞に発表された御製と比較することにより、歌会始が生み出していた「政治的な神話」を解明する。

The Political Role of the *o-utadokoro* and *utakai hajime*

Carbune Maria

The Imperial Poetry Office (*o-utadokoro*) fulfilled a variety of roles during the Meiji era, but it had a particularly large impact on the literary world from the 10th year of Meiji onwards. By correcting *waka* poems of the imperial family and court nobles, organizing poetry competitions, setting up organizations to support the Imperial Rescript on Education, and publishing the Emperor's poems in newspapers and textbooks, the *o-utadokoro* realized a political theory centered on *waka* poetry. Probably the most famous of the *o-utadokoro*'s activities was the revival of the New Year's Imperial poetry competition, the *utakai hajime*, and its decision to allow private citizens to participate in the event. In 1874, poems from the general public were accepted, and after 1879 poems from the public started to be widely submitted. Researchers have clearly shown that the *utakai hajime* has been held continuously from the beginning of the Meiji era to the present. The first *utakai hajime* in the Meiji period was held at the Emperor's request, and in 1881, Baron Takasaki Masakaze, an advisor on the Privy Council, became the head of the Imperial Poetry Office, and began choosing the poetry themes for the *utakai hajime*.

According to Terunuma Yoshiyumi, the motivation for the establishment of the Imperial Poetry Office and the revival of the Imperial poetry contest during the Meiji period was rooted in an esteem for the ancient traditions of Japan and a desire for cultural restoration. In fact, contrary to the imperial poems published in the newspapers, the themes and poems of the poetry competition were not influenced by current events of the time. The *utakai hajime* may have additionally also served to lessen the distance between the emperor and the people. Therefore, I would like to study how the *waka* poems composed within the context of the *utakai hajime* contributed to the construction of the ideology of the emperor system.

In this presentation, I will use Christopher Flood's concept of political myth to analyze the *waka* poems in the imperial poetry contest. Political myth is defined as an ideologically marked narrative that explains past and present events and is accepted by a social group as true. For example, it could be considered that the newly-instituted Meiji holidays, the National Foundation Day (at the time called *Kigensetsu* or Empire Day) and the Emperor's Birthday (*Tenchōsetsu*), also had the function of disseminating and reinforcing political myths. In this paper, I will explore the political myths that were disseminated by the *utakai hajime* by comparing the poems submitted to the imperial competition with the imperial poems published in newspapers, during the period of the Russo-Japanese War.

御歌所と歌会始の政治的な役割

カルブネ・マリア ハイデルベルク大学

本発表では、日露戦争時に御歌所から発表された、天皇と華族の和歌を分析することにより、皇室に関する政治的な神話がどのように伝達され強化されたのかを検討したい。御歌所から催した歌会始の枠組みに発表された和歌と御製一方で、高崎正風という御歌所長から新聞社に漏らした御製の題詠と目的がどのように果たされたかを述べることにしたい。本発表ではまず、御歌所と歌会始が成立するまでの過程や活動し、次に、政治的な神話という概念を定義する。そして最後に、日露戦争時の和歌と御製を、その政治的な役目に注目して分析する。

明治1年から明治13年にかけて、新政府を王政復興として正当化する目的の下、王政が最盛期にあったとされる奈良時代を模して、様々な省や職名、宮廷儀礼が考案、もしくは、復活した。御歌所は、その一環として、明治2年に歌道御用掛として設立され、1945年に解散されるまで存続したのである。

明治時代の御歌所は様々な役目を果たしていたが、特に明治10年から文壇に大きな影響を与えた。というのも、御歌所は和歌を通して、政治的な理論を打ち出していったからである。具体的には、皇室や貴族の和歌を訂正したり、歌会を催したり、教育勅語を支援する組織を立ち上げたり、天皇の御製を新聞や教科書に発表したりしていた。御歌所のこのような活動の背景には、その職員の多くが、薩摩や長州に由来し、御歌所員が神道や国学と深く結びつけられていた事情があると考えられる(1)。御歌所へ最も大きな影響を与えたのは、御歌所長の高崎正風であると思われる。彼は、明治21年から明治45年まで長の役目を果たし、天皇の和歌侍講や枢密顧問官も務めた。彼の活動の詳細には、本発表の後半に触れることとする。

特に重要な御歌所の活動は、歌会始を再興したことと、そこへの民間人の参加を可能にしたことである。明治7年には一般臣民からの詠進も広く認められるようになり、明治12年からは詠進歌も詠みあげられるようになった。一般臣民の参加に関する建白は、明治6年に国学者下澤保射から宮内省に提出された。当時下澤は、津和野派国学者かつ歌人として御歌所に所属しており、福羽美声と相談の上、建白を提出することとなった。。明治15年を皮切りに、御製を始め選歌までが新聞に発表されるようになり、明治17年からは官報にも掲載されるようになった。臣民詠進の歌数は年々増加し、明治21年以降は1万首を下らず、41年からは約3万首が集まった(2)。

村井紀氏によれば、「いわば『動き見える天皇』が次第に記号化し『静かな天皇』として神格化するなかで『歌会始』は『国民』を想像し創出する新聞メディアに登場する。もはや天皇を見ることはないにしても、ばらばらの諸個人は、それぞれ直に、新聞を通して、天皇の『御製』を知り、その意味を付度し、また『題詠』に『詠進』することで、『臣民』として結

びつくことになる」(3)。ベネディクト・アンダーソン氏も、新聞メディアが文化的な共同体を作る役割を果たすことを示した。新聞を通じて、自分から遠く離れた場所の人々のニュースを、国民一人一人が得ることにより、同じ言語と文化に属する人々の繋がりが作られていったと、アンダーソン氏は論じている(4)。ドナルド・キーン氏によれば、明治1年から45年まで、和歌は明治天皇の個人的な感情が伝わる、ほぼ唯一の媒介項であり、国民に直接メッセージを伝える他の方法は存在しなかった(5)。

この間、日露戦争時ほど、明治天皇の御製が国民に届いた時期はなかったと思われる。しかしながら、明治35年から40年に歌会始で発表された明治天皇の御製は、一見、戦争という政治的な大事件の影響をそれほど反映していないようである。一般的に、歌会始の題詠に現実との関係を見出すことは困難である(6)。明治天皇の発意で新聞に発表された御製は、概して感情もしくは歌風の表現として解釈される。例えば、明治37年の御製は「苔むせる岩根の松の萬代もうごきな世は神ぞもるらむ」であり、翌明治38年の御製は「富士の嶺に匂ふ朝日もかすむまで年立つ空の長閑なるかな」であった。前者は、この世が神からずっと変わりなく守られていると詠い、後者は、富士山の頂点に照らす朝日という、とても伝統的なイメージが表現されている。いずれにせよ、この二つの和歌は、安全や平和の気持ちを伝えるものであると解釈され、日露戦争に対する明治天皇の気持ちや意見を見出すことは困難だろう。しかしながら、明治38年に華族や臣民から詠進された和歌の中には、戦争に言及するものが複数存在する。したがって、次に、高崎正風が公にした、明治天皇の個人的な気持ちが表れている、有名な御製を取り上げる。

日露戦争以降、明治天皇の御製は新聞や教科書にも掲載されるようになりし、明治天皇のイメージを、もっと個人的で、かつ、強いものにした(7)。その生涯に9萬首以上の歌を詠んだ明治天皇は、日露戦争時だけで7千5百首もの歌を詠んだ(8)。歌会始で発表された御製が、戦争という現実との関係があまりに弱かったため、高崎正風は、明治天皇の御製をいくつか、新聞を通して公表した。明治37年11月3日(天長節)の『読売新聞』で、「寢覚にも思ひつるかな軍人むかひし方の便りいかにと」という御製が発表されたのである。11月7日には、徳富蘇峰の『国民新聞』が「御聖徳の一端」と題して、3首の御製を掲げた。中でも、「四方の海みなはらからとおもふ世になど波の立さわぐらむ」は名高く、平和的な歌であると思われる(9)。他の2首は「こらはみないくさのにはに出てはてて翁やひとり山田もるらむ」や「ちはやぶる神のころにかなふらむわがくに民のつくす誠は」であった。この記事の執筆者は「この御製を謹んでひそかに記し奉る」と述べており、許可なしで発表していることを認めている。さらに翌日、「大御心」と題する社説では、明治天皇の聖徳と明治天王が世界の平和を好意することに、読者に注意を促している。『国民新聞』はこれを皮切りに、以後もしばしば御製と皇后の御歌数首を紙上で紹介した。他紙も追従するように掲載を開始しているが、圧巻は38年3月28日の『東京日日新聞』であり、御製27位・皇后御歌7首、計34首を一挙に掲げた。通常、歌会始で

発表される御製と和歌を除いて、御製・御歌が新聞で公表されることはなかった。メディアを通じて短期間に、これほど大量に御製が流布するのは極めて異例のことであったのだ（10）。

明治天皇の御製が日露戦争期に新聞等へ流出しはじめた経緯は、宮内省御歌所の二名の懷古談に描写されている。その内の一人は、井上通泰という御歌所四人目の勅任寄人である。井上は『明治天皇行政』編纂の顧問でもあった。彼は自らの懷古談の中に、「明治天皇御集編纂に就いて」という文章を書いており、これは昭和7年刊、改造社『短歌講座 第十卷 特殊研究篇(上巻)』に収められている。もう一人は、御歌所に努めた千葉胤明であった。両者とも、「御製」流出の機を作ったのが高崎正風であったことを伝えている（11）。

井上通泰の言葉を信じるのなら、高崎正風が御製を流布させた理由は「世道人心の為に非常によい事と存じまして致した事」となる。自分の御製が新聞に掲載されることを、明治天皇が好まなかったことはよく知られており、その際に明治天王が高崎を軽く咎めた。懷古談によれば、これを耳にした高崎は「もし之について御咎があらば正風は切腹して申訳を致します」と言い、手で腹を切るまねをしたという（12）。

御歌所長の役目以外にも、高崎正風が、自身の判断で、明治天皇の政治的なイメージを強化し支えるために行った活動がいくつかある。例えば、教育勅語を現実化するための組織を二つ創設したり、明治天皇の御製を掲載した修身教科書を出版したり、明治天皇御製の歌留多を作ったり、天長節や紀元節のための歌を御歌所員に詠ませたりしたのである。一般的に、文学的なメディアにおいて、明治天皇は、万世一系の最後の天皇にして天照大神の子孫であり、日本の精神的な象徴として描写されていた。このような「政治的な神話」は、天皇制イデオロギーに特徴づけられた語りとして、過去や近代の出来事を説明し、社会的に認められた叙述であるとされる（13）。「政治的な神話」は、言語を用いた語りという形式だけではなく、それ以上に、歌や音楽や建物を通して、その象徴的意味やイメージが流布したり強化されたりするのである。「政治的な神話」は、ただイメージを捉えるためのものではなく、自分の世界を理解する道具でもある。私は、高崎が掲げた「世道人心」という概念に、家族国家や君民一家という、神話的な考え方を見出すことが可能であると考ええる。実際、「こらはみな」という御製は、新聞を通して、戦時を生きる臣民の気合を入れる役目を果たした。あるお年寄りの村人は、この御製を読んだ時、明治天皇が自分の気持ちを理解し慰めてくださっているように感じ、子を失った絶望を乗り越えられるようになったと語った。一方、「よものうみ」の御製は、明治天皇や、後には昭和天皇が、戦争に反対する気持ちを表現した歌としてよく知られている。加えて、支那事変や日露戦争の勝利のあとでは、明治天皇も勝利を祝う御製を詠んでいる。つまり、実際のところ、政治的な次元でも、文学的な次元でも、明治天皇自身は自分の意志を明確に打ち出していなかったが、高崎正風が、その時々政治的な状況に最も適切な御製を選び、公表していったのである。

「政治的な神話」を強化するもう一つの方法として、歌会始で撰歌が発表されていたことも考えられる。華族の和歌にも、臣民の和歌にも、天皇を称える表現がよく見られる。例えば、明治39年には、東宮が「あらたまの年の始にあふげ人君がみいつのいやたかの山」という御歌を詠進した。これに対して、光照という御歌所の参考が「君がよをやちよとうたふ國民に山もこたへて年立ちにけり」と詠んだ。一方で、戦争を褒める和歌も撰歌として新聞に発表された。例として、有卿男爵の「あだ浪はなぎしみなどの山たかく御旗なびきて年たちにけり」や、高崎正風の「ももしきの大内山はとよむらむ年のほきこと「祝言」かちどきのこゑ」、宮内大臣・光明田中の「山の名の黄金白銀おほ君の御手に入りけりとしのはしめに」が挙げられる。天皇の御製が臣民の忠誠を強化する道具であったことに加えて、華族や臣民が歌会始に詠進する和歌も、御稜威の君主としての天皇という印象を作り上げる手段となり、それらが新聞を通して、臣民に伝えられていったのである。

本報告では、日露戦争時に公表された、明治天皇の御詠を中心に引き上げ、その分析を通して、明治天皇をめぐる「政治的な神話」の構築過程について論じた。明治天皇自身が歌会始に詠進した御製は政治的中立を保っており、和歌の題材として一般的な感情を表現していた。これは、天皇が、自分の御製を公表することを好まなかったという事情に加え、天皇の謙虚さというイメージを作っていた。また、高崎正風が公にした御製の例に見られた通り、臣民のことを常に考え、心配している、明治天皇の慈悲深さを伝えると同時に「君民一家」という概念もまた作られた。最後に、明治38年の歌会始で詠われた撰歌では、和歌が明治天皇や戦争を称え、その御稜威や誇りを強化した。日露戦争時、御製と和歌とは、一見、政治的なメッセージを帯びていないようであるが、文学的に評価されたというよりも、むしろ、「政治的な神話」を創造し、強化していたと言える。

注

- (1) 宮本誉士『御歌所と国学者』（弘文堂、2010年）35頁。
- (2) 宮本誉士『御歌所と国学者』（弘文堂、2010年）3頁。
- (3) 村井紀「歌会始めと新聞歌壇―短歌による「臣民」と「国民」の創出」『短歌における批評とは』（岩波書店、1999年）80頁。
- (4) アンダーソン・ベネディクト『Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism』（Verso、2006年）25頁。
- (5) ドナルド・キーン『Emperor of Japan : Meiji and his world, 1852 – 1912』（Columbia Univ. Press, 2002）98頁。
- (6) 照沼好文「明治の歌御会に関する研究―上―」（『藝林』34巻2号）57頁。
- (7) 色川大吉『The culture of the Meiji period』（Princeton University Press、1985年）283頁。
- (8) キャロル・グラック『Japan's Modern Myths』（Princeton University Press、1985年）89頁。
- (9) 佐藤一伯「日露戦争時の御製にみる明治天皇の「聖徳」」『正論』391号、（産経新聞社、2004年）68頁。
- (10) 前掲「日露戦争時の御製にみる明治天皇の「聖徳」」、69-71頁。
- (11) 田中綾「明治天皇御製をめぐる昭和十年代 I 文部省『国体の本義』等と御歌所所員「明治天皇御製謹話」の対比」『日本近代文学会北海道支部会報』第10号、日本近代文学会北海道支部事務局、（2001年）20頁。
- (12) 松澤俊仁「よむことの近代。和歌。短歌の政治学」（青弓社、2004年）72頁。
- (13) Flood Christopher『Political Myth』（Routledge、2002年）42頁。